

はやぶさわけ

隼別王子の叛乱

田辺聖子





中公文庫

隼別王子の叛乱 改版

1978年 4月10日初版発行

1994年 9月3日改版印刷

1994年 9月18日改版発行

著者 田辺聖子

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34 TEL 03-3563-1431(販売部)

©1994 CHUOKORON-SHA, INC. / Seiko Tanabe

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202131-6

Printed in Japan

中公文庫

隼別王子の叛乱

田 辺 聖 子

中央公論社

目次

第一章 隼別王子の叛乱 7

第二章 冥界を翔ぶ白鳥くぐい 213

あとがき 347

解説 永田 萌 351

隼別王子の叛乱

第一章 隼別王子の叛乱

舎人・雄鹿の語れる

倉崎山に二度目の夜を迎えた。我々は敵にかこまれてしまった。

敵は、我々が東国へ逃れる前に殲滅しようと思っ
ていらした。我々は難波の都から倭を通り抜け、やっ
とここまで辿りついた。夜の闇の底を走りつ
づけるのは不気味でもあり危険でもあった。しか
し明るい昼間は山に隠れ、夜しか行動
できない。

夜の野や杜を駆け抜けるのはいやなものだ。廃都や、もう人々に捨ててかえりみられない神々を祭った朽ちた社がいくつもあった。謀反人らがその王の御代に続出したために、

忌まれて廃せられた都では、亡霊が行き交っていた。

木々は、葬礼の装飾物のように、ひらひらと葉をそよがせ、月までが不吉に弓なりになっていた。

石女の^{うますめ}嫗^{おうな}たちの亡霊や、古代の王族、長老、民たちの亡霊は、音もなくただよい過ぎていった。廃宮の、崩れて草に埋もれた階^{きざはし}には、飢えた^{やまいぬ}豺^{さい}たちの、おびただしい鳴き声がした。

そしてまた、次の、闇の廃都では、夭折した若者たちの亡霊が、腕をさしのべ物狂おしげな眼でみつめて、光より早く飛び交った。

あるものは、かけよって我々の通過をはばもうとする素振りを見せたが、我々の詰問するような凝視にあうと、死者たちのかげはみな力なく離れ、かき消されていった。

それらは、我々にすがろうとするようでもあり、訴えようとする如くでもあり、また、おびやかそうとするようでもあった。——いやな夜だった。

それゆえ、——最初の光が山々の頂きにさしそめたとき、我々はすこし安堵した。だが明るくなると、別の危険が襲ってくる。

討手の兵に見つけられるかもしれない。我々はいそいで倉^{くら}椅^{はし}山へ逃げこんだ。そうして包囲されていることを知った。

迂^う闊^かに動けないで、下等な夜行動物のように、びくびくしながら、夜の闇から闇へと

逃げ廻っている。数日来、急に気温が下り、寒さに敏感な隼別はやぶさわけの王子は発熱してしま
った。

激しい咳をし、不機嫌に唾を吐きちらし、夕食は食べず、すこしばかりの酒を飲んで
眠った。

一度めざめ、まだかと問うた。我々が救援を求めに東国に発遣はっけんした使者のことだ。ま
だだと答えると、隼別はためいきを一つ洩らして、また苦しげな浅い眠りにおちていっ
た。

浅ぐろい彼の顔には、はつきりと面やつれがあらわれている。いきいきとした奥眼は、
いまは力なく閉じられ、耳連みみづらに結った漆黒の髪は解けて、枕がみにおいた太刀に乱れか
かっている。しなやかな肌の咽喉、はだけた胸もとには、しとどの盗汗ぬあせが灯にきらめき、
首飾りの碧玉の勾玉まがたまは、彼の体温のために曇っている。

彼のなめらかで、熱い胸の奥処おくがには、精緻な美しい鼓動が秘められている。

眠りこんでいる美しい男というものは、艶に不吉だ。

闇の奥から、隼別の従者の片目がじっとこちらをうかがっていた。おれは低声こごえでいう。
「濡らした布を持ってこい！」

片目はおどろくべき早さで、谷川の水で濡らしたらしい布を持ってきた。おれは隼別
の汗に濡れる額を拭いた。夢うつつで隼別はおれの手を払いのけ、それは意志あるもの

のように、強く、おれの頬を撲った。片目は、一つしかない眼を灯に光らせて、おれを見ていた。この男は、隼別はやぶさわけに犬のように忠実で、しかも隼別にしか、心を開かない。それに、ひどい兎脣みづぐちなので、何をしゃべっているのか、隼別にしか分らない。

隼別が夢の中で撲った頬は、おれには少しも痛くない。甘美な痛みだ。つれない隼別よ。おれを撲つか。

昨夜、おれは夢の中で、彼の冷たく硬く、なめらかな四肢や、小さい臀しりを愛撫していった。

隼別は、片方の腕をおれの頸にかけ、片方の腕は、おれにあらがうさまを見せて支えながら、不自然な姿態のまま、おれに抱かれていた。いとしき隼別。彼は火の如き息を吐きながら、おれの腋窩に口づけ、海藻のようにやわらかいしぐさで以て、おれの腕に、あたまを抱えられるにまかせていた。

(やめよ。雄鹿おじか)

と、彼は瞑目したまま、うつつにつぶやいた。

(やめよ、去れ、雄鹿)

だが彼の指もまた、意志ある強き蔓草にも似て、おれの膚はだをさぐり、おれの唇にふれ、あらがうに似せて誘うごとく、ゆだねるにみせて拒むごとく、おれの呼吸に彼の呼吸を合せながら、徐々に悦楽の波のうねりに身を沈めていった。これは夢だと、夢のなかで

わかっているのに。

(隼別。汝は汝の生涯をおれに托すか)

(托す)

と隼別は、おれの唇に唇を重ねるべく、しずかに寄り添いながらいった。

(汝はスメラミコトになる。大八洲国を領有け。太陽は汝の国から昇り、汝の国へ沈むようになる)

そう呟きながら、夢の中のおれは力にみちみちていた。

まるで今すぐ、それが実現するかのよう。——そして朝、灌木の茂みの宿営でめざめた。

その山峡で宿営する前、我々が偵察にやった奴隷兵の一隊が、明け方になってひきあげてきた。彼らはふもとのみすばらしい集落から、徴発というより強奪してきた食糧といっしょに、敵軍の情報をかきあつめてきたが、それはどちらもほんのわずかだった。

敵は精強の兵三、四百あまり、山裾の西南に主力をおき、その他に、かなり有力な別隊が山地へかけて広い幅で散在していた。

敵は大規模な山狩りをして、まるで逃げ場のない手負い猪を追いつめるように慎重に、山の中の我々の、息の根を止めようとしていた。

ところが奴隷たちの報告では、散開した敵軍の動きが迅くなり、本格的な行動を起し

たらしいので（彼らは樹海の間の、おびただしいかがり火や、夜っぴての人馬のざわめき、いそがしく繰り出される伝令の姿を望見していた）、攻撃は、明日かもしれないと思われた。

兵士たちは、不安にかられ、さまざまな憶測をこころみていた。

叛乱軍は、みな殺しにするという、追手の肚がきまったのだ、というのは、肥った奴隷がしらだった。隼^{はやぶさ}別の王子が、倭^{やまと}の大王の弟王子であることなどを、彼らは何ら顧慮しないことにきめたのだ、と彼はいった。

大王の命令は、彼にはおそろしい、あらがいがたい神託のように印象せられるらしかった。彼は叛乱軍と呼ばれるのを怖れ、悔いはじめているのだ。

彼の口髭はだらりと垂れ、動きのさだまらない眼は光を失なった。彼は人さし指で、しきりに分厚い唇をこすり、あきらかにいらいらして剣を鳴らしていた。

もしかして、できることならば、と彼はいった。中央に使者を発し、帰順の方法をとることも考えられる、と仄めかした。彼は、隼別の王子のように尊貴な身分の人を、山中で放浪させるに忍びない、といい、それを帰順の理由にした。

血気さかなな舎人^{とねり}たちはいきりたち、罵り合い、わめきちらし、怒号した。

「もうそんな段階ではない。われわれは目を扶^{たす}られ、耳鼻を削り落され、髪の毛を縛って宙吊りされても文句をいえない側なのだ。おれたちは腰抜けではないぞ。もう引返せ

ないのだ。あんたは命が惜しいのか」

おれの弟の八束穂はもつとも過激で、彼は奴隸がしらを血祭りにあげるぞとおどかしていた。隼別は終始、沈黙していた。

彼の眉は暗く、口辺にはたえずにがい苦しみが浮んでいた。待て、と彼は男たちを見廻していった。

「——私は、東国の使者を待つ」

すると片隅の陰にうずくまっていた隼別の奴隸の片目が、たまりかねたというように何か叫んだ。兎脣の彼は、ものをいうと唾が飛ぶのを恐れて極端に口を開かない。彼がしゃべるのは憤然としたときだけだ。彼は冗談ではない、と叫んでいるらしかった。

彼の言葉を、半分想像で補って類推すると次のようなことである。

これ以上、じっと待っていると、我々は袋の鼠になるであろう、奴らは我々の退路を断つ気でいる。山峡に一隊を迂回させ、挟撃しようとして動きはじめたのだ。奴らはこれ以上待てなくなった、追っ駈けっこに飽いたのだ。一挙にわれわれを屠ってしまう気なのだ。とすれば、じっとして死を待つのは愚策だ。奴らに時を稼がせてはまずい。我々は一刻も早く脱出すべきだ。でないと、沢の蟹を、大石を投げて圧し潰すように、猪を四方から射殺すように皆殺しにされてしまう。――

しかし、おれは王子に与して、兵を押え、待つことにした。その後、おれは武装した

奴隸三、四人を連れて、夕暮れを待ち、偵察に谷に出た。落葉になかば身を埋め、藤蔓に縋って崖をよじのぼってゆくと、とつぜん敵の前哨にぶつかってしまった。

唸りをたてて、おれの額めがけてドキドキするようなすどい矛が、やにわに飛んできた。ハッと身を縮めた我々のすぐ横に、そいつは深く土に突き刺さり、ぶるぶる震えていた。息を凝らして赤土の崖にへばりついていると、バラバラと矢の雨が降ってきた。藪柑子の繁みに人影が乱れ、罵りながら彼らは、濃い藍の夕空を背景にそこかしこの草叢を太刀で払って搜索していたが、まもなく去った。

白茅の列が我々を隠してくれたのだ。なおも進んで高みにのぼると、木々の梢を透かして、おびただしい大軍を見ることができた。

増えています、と兵の一人が低くいった。

朝よりも増えています。

馬も多くいた。今までこんなに集まったのを見たことがないほど、馬が群れていた。指揮者の將軍は、少くとも、二人はいるだろう。

我々位の人数を討伐するのに大げさな話だ。

しかしそれは、大王・大鷦鷯の執拗な忿怒に見合うもののように思われた。

山峡の宿営地に戻ってみると、菜っぱと脂身の浮いた雑穀の粥が、旨そうな匂いを放って煮えくりかえていた。貉と猪が獲れ、兵たちに羹がゆきわたったのだった。男た

ちは車座になって木匙で土器へすくいわけ、唇をとがらして吹きつつ、何杯も流しこんだ。すっかり体が暖まり、我々は咽喉を焼き、鼻を鳴らし、汗をかいてしまった。八束穂は手漬をかねて傍らの榛の木はんの幹に掌をこすりつけた。そうして満足そうに嘔おぐひを洩らした。

隼別はやぶさわけの王子の小舎は、木の枝を組んで急ごしらえに作ったものだった。地面に楯を敷き、毛皮を敷いて王子の臥床がしつらえられた。

小舎の外で舎人とねりたちは火を焚き、それを囲むように眠っていた。八束穂は武装したまま太刀を抱いて地べたに眠っていた。この男のさまは、隼別とはいってもべつのちがった意味で、おれの心に憐愍を起させるところがある——たとえば、愚直に思われるほどの、あまりの若さに対して……。それから、その若さの無防禦なあわれさに対して。

八束穂はまだ十八でしかなく、過激で酷烈で蛮勇を誇る一本気な男だった。彼は隼別だけに忠誠を誓い、隼別を信じていた。彼自身は、おれからあわれまれている、ということば理解できないだろう。しかし若さはいたいなものだ、若さを失ないつつある人間からみると。

八束穂はぐっすり、ねむっている。もしかしたら、難波にのこしてきた愛人の遠見とみこの夢を見ているのかもしれない。

片目は指で禁忌のまじないをしながら、悪霊が、弱った隼別王子の体にとりつかない